

もの言う牧師のエッセー 第158話

「お好み焼き屋の挑戦」

若者を理不尽にこき使うブラック企業が多い今日、大阪のお好み焼きチェーン「千房（ちぼう）」の取り組みには目を見張る。5年前から、刑務所で服役した元受刑者や少年院を出たばかりの元非行少年を雇い、再び犯罪に走るのを防いで社会復帰を手助けしようとしているのだ。刑務所で募集をかけ、入所中に面接して内定を告げ、出所後には会社の借り上げ住宅で先輩社員と共同生活。6カ月の就労体験をへて双方が同意すれば、正式に社員に採用するという。「1人で反省はできるが、1人で更生はできない」と、社長の中井政嗣氏の弁。

接客商売だけに社内に反対論もあったが、「社員にチームワークが生まれ幹部が成長した」と経営に良い影響をもたらしたと言うからスゴイ。同じく大阪市内を中心に営業する串かつ「だるま」、和歌山県内でそば店などを展開する「信濃路」など、中井氏に賛同した企業が現在19社までに拡大し、さらに日本財団が借り上げ住宅の家賃などとして1人当たり月8万円を半年間助成する制度で支援し始めた。

「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた全てと共にありますように。」 2コリント人の手紙 13章 13節。

これは、毎週教会で礼拝の最後に人々を祝福する為に行なわれる祈りである。残念ながら人間には天の父である神は見えないし、キリストも十字架で殺された後によみがえり天に帰ってしまった。しかし、現在の我らにはイエスが送って下さった「聖霊」が一緒にいて助けてくれるのだ。これが有名な“三つで一つ、一つで三つ”という難解な三位一体の実存なのだが、いっぽうで、キリストを信じた者同士もまた、神が3つで一つの様に、一人ひとりが一つとなり、支え合わねばならない。一人ではくじけそうでも、神は、神に罪を赦された者に対しさらにバックアップをして下さる。そして、教会とは清廉潔白な人の集まりではなく、神に罪を赦された者同士が助け合う場所なのだ。苦勞して一人で立ち直る無理をする必要のないところだ。

2014-11-21

